

2024 年度 第 1 回浜松市 “やらまいか” 総合戦略推進会議
議事録

1 日 時 2024 年 11 月 14 日（木）9：30～11：30

2 場 所 本館 5 階 庁議室

3 出席者 委員 13 名

（石川雅洋委員、秋元健一委員、笹原恵委員（オンライン）、小林淑恵委員、名倉秀樹委員、鈴木真由美委員、大橋泰介委員、寺本政司委員、伊藤充宏委員、鈴木芳次委員、山村隆浩委員、鎌田裕子委員及び浜松市長（座長））

事務局 3 名

（企画調整部長、企画課長、企画課長補佐）

4 報道関係者 3 名

5 概 要 以下のとおり

1 開会

（事務局による司会進行）

2 市長あいさつ

皆さま、おはようございます。

本日は、今年度の 1 回目の浜松市 “やらまいか” 総合戦略推進会議ということで、何かとお忙しい中にもかかわらず、皆さまにご出席をいただきまして、ありがとうございます。

また、委員の皆さまには、日頃から浜松市の地方創生に大変ご理解とご協力をいただいておりますことを、重ねて感謝を申し上げる次第でございます。

この会議でございますけれども、ご承知のとおり、地方創生の実現を目指す総合戦略の着実な推進を図るために、有識者の皆さまからご意見をいただきまして、実効性のある取り組みを進めるということで、設置をしているものでございます。昨年度、この会議におきましては、人口減少の状況の分析ということで、政令指定都市の現状を比較するデータを取りまとめてお示しをさせていただきました。

今回は、浜松市の人口減少の大きな要因は 2 つあると思っておりますけれども、少子化と東京圏への若年層の人口流出、この 2 点に注目をして、浜松市の状況を分析の上、状況をお示しをします。また、市内の若者を対象に実施をいたしましたアンケート調査、加えて、若者と意見交換を行いましたので、その内容も併せて報告をさせていただきたいと思っています。

現在、進行している第2期の浜松市“やらまいか”総合戦略は、今年度で最終年度ということでございますけれども、本日は、現行の第2期総合戦略の評価も含めまして、次の総合戦略の策定に向けての考え方についても、意見交換を行っていただきたいと思います。皆さまからいただきましたご意見もしっかり受け止めながら、次期の総合戦略を作成していきたいと思っていますところでございます。

今後も、オール浜松での地方創生の実現に向けて、委員の皆さまには各分野における専門的な知見、知識、経験、そういったものから活発なご議論を、いただきたいと思いますので、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

3 委員自己紹介

(大橋委員)

おはようございます。浜松労働協議会の委員ならびに連合静岡浜松地域協議会で副議長をしております、浜松ホトニクス労働組合書記長の大橋と申します。よろしくお願いします。

私は、生まれも育ちも高校も大学も、それから現在の職場もすべて浜松市内ということで、この地元浜松に貢献できる機会をいただき、大変ありがたく思っております。微力ではありますが、お力になれるように頑張りたいと思いますので、よろしくお願いします。

(寺本委員)

おはようございます。中日新聞東海本社代表の寺本です。今年6月末に転勤で、名古屋から当地に参りました。浜松はもちろん、静岡での勤務が初めてで、ここ5か月間ほどは見るもの聞くものがすべて新鮮で、浜松ライフをエンジョイしております。

前任は名古屋本社の編集局長で、ずっと報道畑を歩んできた身です。過去に、こういった行政の審議を取材したり、分厚い役所の資料に目を通すことがたびたびあり、そのたびにうんざりした経験がありましたが、まさか自分が委員の立場で参加すると思いませんでした。ただ、浜松市は経済的にも恵まれ、農業も盛んななど潜在能力が非常に高い地域と感じています。そして、人の良さというのも肌身で感じております。この街に少しでも貢献できればいいなと思っていますので、どうかよろしくお願いします。

4 議事

- (1) 2023 年度デジタル田園都市国家構想交付金
- (2) 第 2 期総合戦略の評価について
- (3) 次期総合戦略について

(座長(市長)による司会進行)

(事務局から資料に基づき説明)

- ◆資料 1：2023 年度デジタル田園都市国家構想交付金（地方創生推進タイプ）
- ◆資料 2：第 2 期総合戦略の評価
- ◆資料 3-1：次期総合戦略の策定の考え方について
- ◆資料 3-2：人口の現状について
- ◆資料 3-3：若者からの意見収集について

□質疑応答

(鎌田委員)

鎌田でございます。資料 3-2 の 2 ページおよび 4 ページに記載がございます、日本人および外国人というところが示されているのですけれども、この外国人は 4 ページの欄外に、「住民基本台帳および外国人登録による」と記載があるのですが、この外国人は定住者のみでしょうか。あるいは、技能実習や特定技能や留学生や EP（就労ビザ）や、それらの方々も含めて外国人なのでしょうか。外国人の定義を教えていただけるとありがたいです。

(事務局)

住民基本台帳および外国人登録の手続きを取っていただければ、技能実習の方とかも含まれているということでございます。

(市長)

観光とか、一時的に来られている方々は全く対象外ですけれども、技能実習のビザで来られた方は、外国人登録をされていると思いますので、この対象です。

(事務局)

技能実習の方は、外国人登録が必須となっているということでございます。

(小林委員)

文芸大の小林です。質問ではないですが、同じく資料 3-2 の 12 ページ、将来人口推計が出ていますけれども、これは高齢化率が数字でぱっぱとわかると、非常に理解しやすいかと思ったのですけれども。ございますか。

(市長)

資料 3-2 の 1 ページ目の一番下のところに記載があります。高齢化率は一番上の灰色のところが 65 歳人口の比率です。

(小林委員)

ありがとうございます。

□意見交換

(石川委員)

自分も商工会議所で製造業を担当して、工業関係を中心にやっているということになります。今回の少子化と人口流出、本当にそのとおりだなということだと思いましたし、今製造業も言うに足らないのですけれども、これはどこの業界もそうだと思います。採用が本当に難しいところに来ているということは、これから産業はさらに難しくなるなということで、人口流出も大変なことだと思いますし、少子化についても考えなければいけないと思っています。

考えてきましたのが3点ありまして、1つは高校卒業後の人口流出ですけれども、浜松市の方でも今、できるだけ企業と学校がくつつきながらということで、社長が自ら学校へ行って話をするということもありますが、実際、もっとできないかということも言っていて、実際これは動き出しているのですけれども、高校生に向けて企業が企業紹介するということで、前回、城北工業高校へ行って、うちでいうと工業高校が大事なところになるので、企業が全部で16社集まって、城北工業高校の体育館で企業のマッチングではないですが、企業紹介をやらせてもらったというのがありました。

これは音頭とりしているところが、一般社団法人つながるプロジェクトというところで、浜松でも教育委員会がありますが、難しいのは高校となると県になってくるので、その県とやっていかなければならないというところに、壁が1つあるのかなということを思っています。

ただ、これは高校生に聞いてもそうですが、この若者のアンケートにもあります企業を知らないというのは、本当に知らないので、できるだけいろいろな企業を知ってもらおうというのは、非常に大事だなということを思います。アンケートにもありましたが、東京に出て行く理由に、やりたい仕事の企業がない、デザイン関係がないということも言うのですけれども、実際、中小企業でいえば必ずあるわけで、そういうところが高校とくつつく。そのつながるプロジェクトみたいな社団法人だけではなくて、行政もかめるような形になるといい。そこには県の高校というところが、ひとつ大事になるなということを思っています。これを何とか浜松市も入りながらできる形をつくるというのを、1つお願いしたいことかと思っています。

2つ目が、今回は大学の就職だったのですけれども、うちのほうでモノコトチャレンジというのをやっていて、この前、第1回目をやったのですけれども、高校、中学の子たちのワークショップをやって、磐田市なら磐田市、浜松市なら浜松市を、もっとより良いまちにするためにはどうしようということで課題を投げて、

ワークショップなのでグループで、それに賞を付けて、いろいろアイデアを出してもらうということをしていました。

そのモノコトチャレンジに聞いてみたら、企業がテーマを出せるということで、今までもヤマハさんで、例えば音楽を楽しむためにどういったものがあると便利かとか、キヤノンさんでは、ちょうど映像というところで記録と記憶をどう高めていくのか。

行政もかめるし、それが中高一体になって、いろいろなところから来てもらいながら、いろいろなアイデアを出してもらうということをやりました。これは本当にいいなと思ったのは、中学校、高校のうちから、そういったまちづくりということ、アイデアづくりみたいなことも含めて、そういったこともできるし、企業にとってもいい宣伝の機会というか、自分もこういうことやれるんだよ、帰って来ればこういうことがやれるんだよ。大学へ行ったとしても、帰って来ればこういう会社があるんだよということを、中学校、高校のうちからできるということで、そういったこともぜひやっていただけるといいなということを思います。

これも中学、高校となるとさっきの話で、教育委員会と県の高校のところはネックになってきて、そこを乗り越えないとなと思うので、ぜひそこはうまくできるといいなと。さっきの社長が行ってというのもそうですし、企業がどんどん高校に出て、高校生も企業に来てもらってやれるといいなと。

逆に今でいうと教育委員会のおかげで、小中のところは結構回ってるんですね。事業としてももう成立していますし、それがなかなか高校になってくると難しいというのが現状なので、ぜひそこを社団法人では進めているので、行政でもやってくれないかということを思っています。

もう1つの少子化の方ですけれども、これも商工会議所で浜松市とお願いして、婚活パーティを9月、10月、12月とクリスマスにかけてやりますが、婚活パーティの社長さんといろいろ話をして面白かったのが、ここにもありますけど結婚したいという人が7割、8割ぐらいいます。実際に婚活で動いている人はどれぐらいいるかというと2割とか3割ということで、結婚はしたいけれども自分からは動いていない。

とすると、動くチャンスをできるだけ与えてあげるとするのがすごく大事。それがアプリであり婚活パーティであり、いろいろな場をつくるということなので、そこはどんどんやればいいのかということも思っています。

そういった中でも、将来が不安だという方がいるとは言え、間違いなく子どもを持ちたいということを言っているので、将来が不安というのはお金のことが入ってくるので、その補助は浜松市として、行政としてどんどんやって行けばいいのかと。行政だけではないですけど。その補助をやってあげて、できるだけ子どもを持たせやすい環境をつくるというのは、すごく大事なのかなと思います。

た。支援の在り方みたいなのところも、もっとできるのかなということは思います。

最後にもう1点だけ、元気なまちづくりというのは自分もすごくいいと思うので、これができるだけビジュアルでわかるように、浜松市の誰もがわかるようなものにしていきたいと思います。今話したようなことだとは思っているのですけれども。働き口もあるよだとか、こんな職業もあるよというのもそうだろうし、こんな生活ができるんだよ。

浜松らしいまちをつくりたいといって、私は今回の資料で一番面白かったのは、一番最後の若者のアンケートの生の声というか、本当に浜松らしいところ、もっと緑なら緑を増やしてやって、私がよく思うのは、公園だとかいうならば、鍛冶町の辺りなんか車走らせないようにして、誰もがウォーカブルなまちで、健康的なまちにつくって行くというところが、ランドマークというか、アイコンになるまちになると、子どもたちも遊べるし、高校生たちも帰って来なくなる、帰る理由がないから帰らないと思っているのですが。帰りたくなるようなまちにするというのは、一丁目一番地にあるなということと思っています。

ざっとまくしたてたのですが、1つは高校のところで企業とくつつく、そういったマッチングがあるといいなということと、中高一貫でワークショップ。ひょっとしたらこれは小学校でもいいと思うので、企業でいうと早いうちからどんどんやっていけば、小学校の子のためにもなるし、企業のためにもなると思うので、そのワークショップみたいなことを繰り返しやって行く。ワークショップに限らずだと思いますけど。

あと婚活の話と、最後は元気なまちということで、話をさせていただきました。以上です。

(秋元委員)

パワーフード学会秋元でございます。石川副会頭のお話は身に入る本当にそのとおりだなと思って聞いておりました。そこにも関わってちょっと話が広がってしまうのですが。

皆さまもご存じのように、コロナが明けてわれわれ飲食業会で言いますと、お客様が戻っているという状況にはなっておりますが、飲食店、あるいは商店の現状とこの人口流出は、かなり密接な関係にあるのではないかなと思っています。それはやはり、まちの中に魅力があるかないかということに尽きると思います。残念ながら、最近、浜松の老舗や若手の起業家が経営する飲食店等が相次いで閉店、廃業しています。本当に今この現状は直視しなくてはいけないのではないかなと思っています。

簡単に言えば魅力がないからこういう状況になっているわけでありまして、それと同時にコロナ借金の返済が始まり、そこに追い付かなくなって M&A などによ

り、経営主体が変わっていくという状況もあり、本当にまちの魅力がどんどんなくなっていくと感じます。

老舗がなくなるというところと言うと、私も4つほど老舗のお店から相談を受けております。「もう厳しいよ」というお話もあります。このまま行くと本当に、浜松の魅力であった老舗がどんどん減って行ってしまうところにも、大きな問題があると思っております。

やはり人口流出というところも、石川副会長がおっしゃっていたように、実は自分に適した仕事があるのにそこが見えてない、気づいていないというようなこともあるのかなと。浜松市さんが意見収集くださってよくわかりましたけれども、やはり楽しめる場所がないという。そういったところが人口流出というか大学生たち、あるいはここで育った子たちが、外へ魅力を感じて出て行ってしまうということになってしまうのかなと思います。

ですので、やはりこれは2つ。1つは新しい浜松の魅力の発信の仕方を開発するということは、絶対に必要だと思っています。若い人たちが、どうしても浜松に行きたくなくなるようなコンテンツをつくらなければいけないのだ。あるいはそういうとがった店にならなくてはいけないのだという、そういう強い気概を持てる商人たちを増やしていくということが絶対に必要だと思っております。

大きな意味でいうと、いろいろな集客するための魅力づくりというのは、お金のかかることも含めてあるとは思いますが、やはりこれは日本の中でもすごく優れたもの、あるいは世界から見ても優れたものというのが見える化できること、そして、そういう集客するための魅力づくりも、意識してつくっていくべきだと思います。

それともう1つが、浜松の大事な老舗の飲食店や商店を守る事です。コロナの借金を返せなくなった人たちが、今、リスケジュールという状況になって、半分銀行管理で借り入れも起こせない状況です。コロナで1億、2億借りてしまった人は、重くのしかかった返済が始まりまして、売り上げは戻ったけれども倍増した返済額に加え、物価高による経費の増加にもかかわらず売値を上げられないという恐怖と毎日戦っている状況でございます。

ぜひお願いしたいのは、借り入れではなくて、今の返済額を延長して借換えができるというような、そういう施策を国の方で対処をしていただければ、延命ができると思っています。その間に浜松の魅力を全国あるいは世界からお金を持ってきていただけるような観光資源に磨き上げ、新たなマーケットを創り上げるのです。

どうしたらお金が生まれるかということを考えていけばこれは全てにつながってくる、老舗も守る、浜松の魅力も守る、子どもたちも楽しい、職場がある、楽し

める場所もある、これは全てにつながってくるのではないかと思います。私から以上でございます。

(笹原委員)

静岡大学の笹原です。

いろいろなご報告ありがとうございました。非常にいろいろな形で浜松市が頑張っている様子がよく伝わってきました、考えさせられました。

私の方からもいくつか意見があるのですが、1つは「子育て世代を全力で応援するまち」という基本目標の2つ目のところで、放課後児童会の拡充という項目が「C」となっていて、50%となっているのですが、資料2の13ページです。

私は浜松市の事業で「はままつ女性カレッジ」という子育て世代の女性たちが、女性に関する施策について考えるプログラムのアドバイザーもしていますけれども、待機児童の問題は非常に深刻で、うまく預けられないと女性たちは働き続けることができないということで、先日も話題になりました。浜松出身で家族や親族がいる場合には、何とかそれでしのぐことができるけれども、そうでない場合に、学校併設の放課後児童会に預けることができれば仕事が続けられるけれども、それもなかなか難しいということで、17ページを見ていただくと、放課後児童会の定員を1,345人増やすことができたということで、歴代の待機児童数を見ていると、2020年の343人から2021年の261人、そして2022年の190人となっています。

この間、努力をなさって待機児童が減っているということは、非常によろしいことなのですが、この後ちょっと横ばいになっていて、200人近くの待機児童がまだ生じています。浜松市はやはり「子育てのしやすいまち」を目指していて、非常に重要な問題ですので、もしかすると現在の枠組みだけではなく、他の市町が行っていることでいうと、放課後児童会自体の枠組みを検討したり、あるいは、確か静岡市さんが行っていると思うのですが、放課後児童会に入れられなかった場合の、緊急避難用というか、受入れのセンターみたいなものを浜松市の方でつくったりするとか、何かしらここは手を入れた方がよろしいように思います。

もう一点、あるいは、地域の子育て力の向上については、評価としては悪くないのですが、後で自治会の方も発言なさるかもしれませんが、私も自治会の調査をしているのですが、若い人たちや、子どもたちがいる世帯の参画というのは、残念ながら少し低くなっていて、特にこのところ子ども会に入る子どもたちが減っているということも聞いているので、住民の活動ではあるのですが、若い人や子どもたちの参画は、子どもたちの地域への愛着や人々のコミュニケーションということを考えても非常に重要ですので、そういったことを強化してはど

うかと思えますし、この地域は防災について非常に力を入れなければいけない地域なので、もう少し防災活動とかと組み合わせてできないものかと思っています。

あとは女性の就労支援、単体としてはA評価になっているのですが、今言ったような形での、子育て中の女性たちの支援というところで見ると、もう少し枠組みを検討する必要があるかなと思っています。

それから、今回の若い人たちの調査からは、地元への愛着が非常に高いということがわかり、これは非常に素晴らしいことだと思います。実は私も今大学院生の息子がいるのですが、息子もぜひ浜松に戻ってきたいと言っています。そういった意味では、地元に戻ってきて仕事をしたいという郷土の出身者たちも一定数いると思いますけれども、先ほどもお話もあったように、なかなか就職先として、適切なところを見つけることが難しいということもあると思いますので、先ほど石川様がおっしゃっていたと思いますけれども、それは地元の中小企業であるとか、あるいは、いわゆるB to CではなくてB to Bの企業については学生は知る機会が少ないので、なんとかそういったマッチングを図って、若者の定着を進められないものかと思っています。

それともう1つ、私たちの大学関係者が努力しなければならないのですが、若者たちが地元で進学しようとしたときに適切なところがないということで、静岡大学は浜松市長さんをはじめ、皆さまにご心配とご迷惑をおかけして大変申し訳ないですが、私たちも魅力あるプログラムを提供して、今よりももう少し幅広く地域で学べるような体制をつくらなくてはいけないと思っています。以上です。

(小林委員)

静岡文芸大の小林です。皆さま具体的なお話をされていらっしゃるのですが、私は漠然とした話になってしまうかもしれないですが。浜松の大学に着任して4年目になります。それで今回、浜松国際ピアノコンクールというのを、初めて体験するんですね。3年前はコロナで中止になったということで6年ぶりということで、通常300人台のエントリーだったのですが、これが600人台に増えているということで、非常に音楽業界では活気を呈しているという状況だと思います。しかしながら、先日、静岡新聞の中にあっただけなのですが、市民の中にはそれほど浸透していない状況なのではないかと思っています。

1次予選に行ってみたのですが、すごくレベルが高くて本当に面白いイベントだなと思いました。

前回6年前の表彰式のときの入賞者のコメントをYouTubeでやっていたので、それを見ていましたら、皆さま恩田陸さんの小説『蜜蜂と遠雷』というところに描かれたこともありまして、すごく思い入れを持って、この浜松というまちが、自

分たちにとってものすごく印象深いまちになったということ、6 人の入賞者の方が皆さま口々に、こんなにいいまちだった、こんなに思い出深いまちになったというふうにおっしゃったんですね。それを見て印象的に思いました。

ちょっと旅行に行ったり、ちょっといいまちだということではなくて、自分たちが青春の夢を燃やしたまちとして、強く心に刻み込まれたという、そういう出来事はなかなかないのではないかなと私は思いました。

もしかしてこの浜松のまちは、30 年前に音楽の都として駅前開発をして、アクトシティをつくったと思うのですが、その時のコンセプトをもっともっと打ち出して、音楽家がここに来たら、何かチャンスがあるのではないかな。そんなふうに見えるまちづくりというのが必要なのではないかと。音楽に限らずですけども。

何で若い人が東京に行くのかといたら、自分の夢とか将来の希望とか、それを実現させるまちは東京でないとないんだということがあると思います。さらにもっと夢を見るとしたら、海外に行くしかないんだというふうに普通思うと思います。一般の人が暮らしやすいまちづくりをするということも、1 つ重要なことではありますけれども、そういう若者の、最初にありました「チャレンジできるまち」、これをもっともっと打ち出していくといいのではないかなと私は思いました。

前職、文部科学省で博士人材の追跡調査というのをやっております、研究人材、イノベーション人材をいかに育てていくかということをやっていたのですが、博士課程に行く人材もすごく減っています。博士の全体数を増やそうとしていて、誰が博士号を今取っているかというと、企業にいらっしゃる中高年の方々が、ちょっと言い方が悪いですけど、箔付け的に博士号を取っているという状況で、若い人はとてもリスクが高くてチャレンジできないんです。途中で優秀な若い人材が、どんどん研究業界から流出していくという状況があります。

音楽も同じように、音楽では食べていけないので、途中でもっと現実的な路線にというふうに、優秀な才能がある人もキャリアチェンジしていく状況なのではないかと思えます。それも日本全体の今の若い人の状況なのではないかと思ひまして、その辺り浜松のまちとして、これだけ「音楽のまち」としての特徴があるわけですので、その魅力を生かして、将来音楽家として活躍したい、あるいは博士として活躍したいという人を、リスクを取ってチャレンジできるまちにできたらいいなというふうに思っています。

漠然とした話で申し訳ないですけども以上です。

(名倉委員)

静岡銀行の名倉でございます。私は浜松で子どもを育ててまいりましたので、子育てするまちとして、浜松市というのは非常に住みやすいというのは実感としてあります。

一方で先ほど来からありますように、若い人たち、若い時代、いろいろなところで学習を積んで、キャリアを積みたいという希望がどの若者にもあると思います。キャリアを積むには、経験を積むには、新しいことをやるにはということ、首都圏に行くという流れがある中で、最近、象徴的な若者に2人会うことがあって、そのエピソードをお話しますと、1人は東京本社の人に勤めたい。だけど静岡県内に住みたいと。静岡県内の事務所、営業所で勤めるということを経験として就職を決めましたと。

もう1人は転職したいと。転職する理由は何か聞いたときに、周りを見てみると変化が激しくて、もっとキャリアを積んでいかないと仕事が続けられない。キャリアを積むために東京のノウハウをもっている会社に行きたい。ただ、サテライトでいいと言われたと。新幹線通勤で週1回来てくれれば雇用しますと言われたので、静岡に住みながらその会社に勤めることを決めましたと。

そういった話を聞いていると、なかなか若者の人たちが就職したい企業の本社を誘致してくるというのは難しいと思いますが、例えばサテライトで浜松から勤められる。浜松にいながらその会社に勤められるという企業、そういったパートナーの企業を増やしていくことによって、若者たちはここに住みながら、キャリアを積んでいけるというような環境が整備されてくるのではないかなと思った次第でございます。

そういうことができている中で、家族を持ちながら子どもも増えていくといったところがあればなと感じました。以上でございます。

(鈴木真由美委員)

浜松いわた信用金庫の鈴木真由美です。よろしくお願いします。

私は今日参加させていただきこの資料を拝見させていただきまして、すごく浜松市さんも頑張っているし、すごいな、わかりやすいなというのが実感でした。

今言おうと思っていたことを考えていたのですけれど、こういった資料を見ても、今回の資料でも、やはり東京への女性の流出、それがすごく多いなというも思っていて、それについて前回までもいろいろやってきましたし、次回の戦略の人口減少についてでしたので、そんなところで結びつく話と思って、この順番を待っている間にいろいろな方の話を聞きながら、ちょっと思ったことなのです。

そうした中で、浜松市は、よく製造業のまちだから女性の働き先はないよねと言われるので、それではぜひ女性の働き先を考えて行って、女性に浜松にいてもらいたいと私は思って、そういったところをすごく考えました。

そうすると、この状況から行くと観光とか、そういったところにも目を付けられるなと思って、ネットで調べていたら、浜松市とか湖西市とかその辺で有識者会議のような、浜松・浜名湖ツーリズムビューローみたいなものも市もやっているし、あらゆることを市もやっていて、いまさらながらと思った中で、少し逆転的な発想を今この話を聞いている中で、石川副会長さんだったり、秋元会長さんは経営陣だけあって、この早い時代の流れの中で、私たちサラリーマンより、とても危機的にいろいろ感じ取っているなと思ったところからの私の発想で、それから市長が冒頭言われた実行性があるというところだったりとか、寺本さんが、浜松はとても楽しい、そして浜松ライフを楽しみたいと先ほどおっしゃっていました。

その中で、秋元さんの言葉を借りると、新しい浜松の魅力の発信、そのコンテンツを考えるという中で、今思いついたのが、浜松は日本で富裕層シニアが住むの一番よいまちとか、60歳を超えたら浜松市とか、老後は浜名湖の、エデンの園のような高級マンションみたいなフレーズで、逆にお金持ちのシニアを、そういったフレーズで呼びこんで、そうするとお金持ちの周りにはお金を落とす仕組み、そういったものが必要になる。

そうなったときに、産業だったり観光だったり医療だったり、そしてそこには、お金持ちさんを相手にしているので、高いギャラを払い、女性も魅力のある仕事をどんどんやって需要を高め、そして浜松市の消費を増やす。

浜松は温暖であったり、浜名湖があったり、東名も新幹線も通っていて、住みよいまちというのは本当に太鼓判なので、そこで逆転の発想で、でる人ばかりを止めようとしても、そこはなかなか難しいので、逆に何かのそういったコンテンツ、的を絞ってお金を持って来てくれる仕組み、そういった中で富裕層シニアが住みやすい浜名湖の中で、聖隷さんのエデンの園さんのような、高級マンション的な一角をつくって。

エデンの園さんに午後もお客さまをアテンドしに行くんですけど、浜名湖エデンの園と言っても、浜名湖が実は見えなかったりするんで、それだったらもうちょっと立地を利用したそういったものをつくって、他には無い差別化。ちょっとブーイングの話になってしまうかなと思ったのですけれど、いろいろなことを二番煎じでやっていると駄目なので、そういったところで、思いきった改革となったら、逆にそういう人たちを呼び込みながら若い人を止めるような仕組み、そういったものを考えていくのもどうかなと思ったりしました。以上です。

(大橋委員)

今まで皆さまのお話をお伺いして、初めて参加したのですけれども、非常に熱い思いを意見として述べているところがありまして、正直、圧倒されております。そこまで私が熱い意見を述べられるかどうかわかりませんが、ご容赦ください。私からは3点ほど意見をさせていただきたいと思います。

1点目ですけれども、若者からの意見収集についてということで、実際にこれは転出が続いている浜松市の状況ということで、生の声を聞くという意味で、若者から意見収集を行ったというのは、非常に素晴らしい取り組みであったかと思えます。その中で、少し気になった箇所がございました。今回、浜松市在住大学生との意見交換ということで行っていただいたのですけれども、参加人数が39名ということで、アンケート結果とするには、サンプル数としてももう少し数があつた方がいいのではないのかなと感じました。

私としては、意見交換という形で行うのもいいのですが、シンプルにアンケートという形で、Web形式だとか、もっと意見を収集しやすい方法で、多くの意見を収集するというのもひとつ案としていいのではないのかなと感じました。

それから、今回意見交換を行ったのが市内在住の大学生というところで、正直、市内在住ということは、もう既に浜松市に興味を持っていただいているので、浜松市に住んでおられる方というのは、非常に多いのは理解できると思います。その反面、浜松市で育ったのですけれども、外に出て行かないといけなくなってしまった、もしくは東京だとかに興味を持って出て行った。そういった若者の意見を聞くというのも、今後、浜松市に人口を呼び戻すという意味では、実態把握という意味で必要なのではないのかなと感じました。

連合静岡としまして、会員は非常に多くの人数がいますので、例えばお子さんが大学生だとか、お子さんが就職して県外に出て行かれたという方もいっぱいおられますので、そういう方に対して、お子さんにアンケートやってくれないかということで相談するのも、1つの案としていいのではないかなと感じました。ぜひよろしくお願いします。

2点目ですけれども、転出増加が続いているというのは、働く所の問題というのが非常に多いのではないかなと感じております。実際、弊社、浜松ホトニクスでは昨年度は200名新卒採用しました。200名のうちほとんどが浜松市外からの就職の方となっています。多くの方が浜松市内の寮に今住んでいるという状態です。

過去の流れからしますと、弊社の場合は、そのまま浜北区に定住するという方が非常に多いという印象があります。連合静岡だとか他の労働組合の方と話をしている中で、少し感じる部分がありまして、弊社であつたり、スズキさん、ヤマハさん、ヤマハ発動機さんなどの浜松地域で大手と呼ばれている企業さん、そうい

ったところは採用で、県外から多くの方を採用できている状況にあると思います。

その反面、中小企業の方は非常に採用に苦労しているという話もよく聞きます。集めたいけれども、人が全然集まらないというふうに聞いております。そういったところの問題点と言いますのは、大手といわれる会社は魅力といいますか、技術であったり、製品群といったところに、非常に興味を持っていただけている状況があるのではないかと感じております。

中小企業も浜松地域の中小企業は非常に魅力のある企業が多いと思います。そういったところの魅力の発信の仕方ということを、行政の方で何とかやっていただいて、就学生に中小企業の魅力をより感じていただけるようにすることで、県外からの中小企業への就職をあっせんしていただけると、非常によろしいのではないかなと考えております。

最後、3つ目ですけれども、これは肌感でよく感じていることですが、新入社員の若者と話をしている中で、よく東京の大学の方から就職される方が多いので、なぜ浜松へきたのか聞くこと、企業に魅力があったからということでおっしゃっていただけるのですけれども、実際、遊びだとかそういうところはどうか聞きますと、やはり遊ぶところが少ないと。毎日自然と一緒に遊ぶしかないですねというようなことをよく聞きます。

そういった面で、街中の再開発というのは、非常に大きな課題ではないかなと考えております。街中が再開発されますと、就職だけでなく、浜松の大学の魅力が増すというか、そういったところにも寄与できるのではないかなと考えておりますので、街中の活性化というところも、今後ぜひともよろしくお願いいたします。以上です。

(寺本委員)

人口減というお話がありましたが、そもそも人口減は、決して浜松市に特有の問題ではなくて、日本全体に共通する問題だと思っています。もっと言えば、世界の先進国が直面する共通する課題でもあります。

婚姻や出産、あるいは居住地を選ぶというのは本来、個人の自由や個人の価値観に基づく行為です。そういう意味で、個人の自由や価値観を行政が意図的に変えていくというのは、いささか無理があるのではないかなと思っています。国民的作家の司馬遼太郎さんは1990年代初めごろ「美しき停滞」という言葉で、これからの日本について言及していました。日本は近代明治や戦後の高度成長を成し遂げた若々しい時代を過ぎ、これからは成熟して老いていく国になっていくという将来です。今でもすごく覚えている言葉なのですけれど、要は少子高齢化で人口減が進む現実を受け止め、日本が成熟した国に相応しい姿をどう描いていくかという議論でもあります。人口が減っていくということを前提にして、例えばど

ういう行政サービスができるのか、あるいはこういった地域をつくっていくのかを考える方が非常に大事ではないかなというふうに思っています。先ほど鈴木さんのお話しであった温暖な浜松の気候を生かして、高齢者が集まる街にする、というのは非常にいいアイデアだと思っています。全国各地が一律に同じようなベクトルで考えるのではなく、地域がそれぞれの特色を活かしながら将来を考える必要があると思います。私は、浜松が日本のフロリダを目指せばいいと思います。フロリダには高所得の高齢者が住んで、その生活を支える介護、医療スタッフがいます。また、温暖な気候を活かしたディズニーワールドがあり、多くの家族連れが訪れます。その結果、フロリダは全米の中でも財政的に豊かな州になっており、高齢化を逆手にとった、そういう生き方もあるのではないかなという気がしています。

地方の産業や経済を繁栄させる戦後の日本の国土形成は限界が来ていると思います。結婚や婚姻によって人口減を食い止める考えはある意味、子どもを労働力としてみなす考え方だと思います。人手不足は子どもではなく、外国人労働者で補うとか、経済成長と出産や婚姻は別物として考えていく必要があるのではないかと思います。

個人的な意見ですが、少子化対策に関しては子育て世代の親に向けては支援策が充実してきたような気がします。子ども自体に向けた政策はどうでしょうか。子どもが安心できる、伸び伸びと成長する姿が世の中にあふれれば、子どもが欲しいという社会的な欲求が自然と高まります。例えば偏差値偏重の学校教育を見直すとか、学校内のいじめを撲滅するとか、将来のキャリア形成を充実させるとか、子どもの視点での政策にもっと目を向けることも必要ではないでしょうか。

「No one left behind」、誰も取り残されないという子どもファーストの視点を少子化対策にもっと活かすべきだと思います。

地方の人口流出は、私の前任地、名古屋でも起こっていて、特に若い女性の東京への流出が最近増えています。浜松も同じ構図だと思いますけど、やはり製造業が中心で、女性が活躍し、キャリアアップする場が少ないことも原因かと思います。また、昨今の働き方改革を背景に、余暇を過ごす時間が以前より多くなり、オフに楽しめる街の魅力に対するニーズも高まっていると思います。これからの街作りは雇用など経済的な側面だけでなく、文化的、アミューズメント機能などの要素にも関心を払う必要があるのではないかと感じています。

最後になりますが、今後の街作りに関しては計画だけでなく、財政の裏付けも同時に進めるべきだと思います。人口が減れば、今の行政サービスを続けるのは難しいと危機感をあおるのではなく、人口減を見据えて政策の無駄を省くとか、政策にプライオリティをつけるとか、行財政改革をセットにして考えていくことも必要かと思います。

(伊藤委員)

静岡新聞・静岡放送の伊藤でございます。私はこれで2年この“やらまいか”総合戦略推進会議に参加させていただきました。今日も非常に貴重で興味深いデータを示していただきありがとうございました。これまでの活動の中で、浜松の現在地、そして浜松市が展開するさまざまな施策に対するリアクション、反応がつかめたという意味で、非常に成果のある会議を開けたのではないかなと思います。

それと同時に、これまでの調査は、人口問題にV字回復はあり得ないということを示していると思います。今後の戦略会議の展開を見ますと次は2034年の姿を目指す、10年後の姿を目指すということが書かれています。ここは僕は超現実的に考えられた方がいいのではないかなと思っております。10年後だとすぐになるので、もうちょっと長期的でもいいのかなという気もいたします。

先ほど小林さんでしたか、おっしゃっていましたが、気になるのは65歳以上の人口の比率です。若者が減ってしまうということも1つですけれども、年代別の人口構成比率が恐ろしく変わっていくということ、これはひとつ大きな問題だと思います。

そういう中で働ける労働力の問題であるとか、いろいろな問題が出て来る。2034年にどうしたまちをつくっていくか。これを本当に次の戦略会議では考えていった方がいい。足りない労働力をどの程度外国人に期待していくのか、あるいはAIで補っていくのか。そして学生を増やすためには、どんな大学の構造がいいのか。今大学の再編のことで浜松と静岡でいろいろなことが論議されていますが、この大学の在り方もしっかり考えた方がいいと思いますし、石川さんが最初におっしゃっていたように、若者に対して企業がどんな在り方、魅力をしめしていくのかということも、10年後を見据えてしっかり考えていった方がいいなと思っております。

あともう1つは、若者たちの考えていることは、ここにいるわれわれではたぶんわからないだろうということでございます。われわれは時々「いいですね、メディアさんは」というような言い方をされるのですけれども、昔に比べたら基本的にメディアに興味を持つ若者は相当減っております。それとともにこんなことに興味があるのか、こういう就職先を望んでいるのかというのが結構あったりしまして、大人といいますか、われわれの想像を超えたところがあります。そういった若者へのアンケート調査をもう1回しっかりやってもいいのかなと思っております。

流出を食い止めるということが1つなのですけれども、今までも出ていましたけれども、いわゆる東京に憧れを持って、東京で何かできるだろうと行く若者が多いのですけれども、時々会うともう東京に疲れて帰って来たいという若者も結構

いるんですね。なかなか現実は厳しいですから。こういう言い方は適当ではないかもしれないですけども、東京に憧れたものの地方の良さに気づいた“東京こぼれ組み”を救うようなまちづくり、これもひとつあるのではないかなと思っております。

小林さんから先ほどピアノコンクールのお話をしていただいたのですが、私、実は30年前にテレビ記者でここにおりまして、第1回目のピアノコンクール取材させていただきました。当時はアクトもまだなくて、鴨江別館などの施設で予選をやっていたという時代でございました。そこから比べると30年、浜松はすごくいい“音楽のまち”になっている。徳川家康ブームで“歴史都市”としても認められ、ポテンシャルは随分高まっております。そういうことも相まって、夢を持って現実を見つめていく、そんな次の10年間の計画ができればなと感じております。以上です。

(鈴木芳次委員)

最後の方になって来ますと、私が話そうとしたこともだいぶ出まして、あまり話すこともないですけど、今日資料をもらった時にお話ししたいなと思ったことは、秋元さんが言われました中心部の活性化という話が、私は非常に気になっています。先ほど話がありましたが、老舗がどんどん廃業、それから転業していつて、その跡地はおそらくマンションでしょうということになっています。

それから、まちも夜行くと、大型居酒屋、東京都圏のチェーン店がほとんどでして、地元の企業というのは、頑張っているのは秋元さんのところぐらいしかないんじゃないかなと思っていますが。本当に夜のまちも寂しいし、ちょっと行こうかなという気にならないですね。空き家の問題も出ていますが、空き家の問題、それから店舗の不況の関係。店舗の不況は秋元さんに説明していただきましたけど、やはり大変だなという感じは受けました。

この不況の原因の1つも、浜松の住みよいまちの中で大学生の意見も出ましたが、でも、浜松の市内の交通の便が非常に悪いということが出ました。これは例えば夜外へ出ても、郊外の人には10時前には帰らないといけません。それでもなかなかタクシーで帰れませんので、そういった点もありますし、皆さまご存じのように、政令市の中で交通事故が一番多い、ワースト1が13年も浜松は続いている。この一番大きな原因は、交通手段が続かないということが一番大きいらしいですね。

例えば私は赤電の近くに住んでいますけど、赤電に乗って行って、聖隷病院に行こうと思ったときに、そこからどこへ行くのか。またずっと出てぐるっと回って行かなければいけないとか。便が非常に悪いというんですね。ですので、おのずから車で行かなければいけないということになって、そうすると車が非常に多くて交通事故が一番多い都市になるのではないかなということの説明がありました。

大学生も言っていましたけど、市内の交通の便が非常に悪くて移動しづらい。これは本当によくわかるなという気がします。

大きな問題ですので簡単にはいきませんが、これから長い間には、考えなければいけないことだなと。今浜松も民間企業の遠州鉄道さんに全部任せてありますけれども、民間ですから当然ですが、もうからない所はどんどん切ってしまうんですね。もちろん山間地はそうですけれども、そういった点がこれからどんどん増えていくのではないかと思います。

それからもう1つは、人口減少に基づいて子どもの数も減っているんですね。私は自治会を長くやっておりますけれども、町内でも子どもがいないというのは非常に困ります。浜松まつりの中で女の子が屋台の上でおはやしをやりませんがいいです。ラッパを吹く子もいないんですね。小学校2年生ぐらいの子がプープー吹いてるだけでは、ラッパのリズムにならないんです。そういうような本当に小さなことですが、かなり影響が出ています。そうしますと親御さんたちが、人数が少ないものですから役員をやるようになってしまいますので、お母さんが子ども会へ入れないんです。子ども会の衰退なんかすごいですよ。全然もう運営できないような格好になっています。

そこら辺のところも人口減少に関わっての話ですけれども、子どもの減少もひとつ目を付けていただきたいと思います。この中で放課後児童会の話も出ていましたけれども、放課後児童会も委託方式で、前回も私この話をさせていただきましたけれども、変わったようでいて、いい方に変ったのか悪い方に変ったのか、その辺のところの目配りを、ぜひ教育委員会の方でやっていただきたいと思います。私はいいなと思うこともないですけれども、市の方に言いますと、「地元の皆さまのご協力をいただいてぜひ」と、こういう話が必ず出てきます。地元もやることに限りがありますので、自治会の関係から言いますと、そういったことである程度、市の方で、また行政の方でやっていただけるのであれば、それを徹底的にやっていただきたいと思います。そんなふうに思っております。前後した話でしたけれども、以上で終わらせていただきます。

(山村委員)

静岡県社会保険労務士会浜松支部長の山村です。人口減少の大きな要因は、資料にもありますように、少子化と若者の東京流出の2点です。

まず少子化についてですが、実際、結婚している世帯につきましては、子2人世帯というのが一番多いのではないかと思います。それは過去50年間あまり変わっていない様です。もちろん結婚をする人たちを増やすというのも大事なのですが、既に結婚をして子どもがいる世帯、特にその2人世帯で3人目を産むインセンティブを与えるということが、一番早道なのではないかと思います。

そのインセンティブは何かというと、これは主に国の施策になってしまうのですが、よくテレビの『そこまで言って委員会』なんかで竹田先生が、「1千万円出せ」とかそういうような、本当にそういうことが必要なのではないかと考えております。

あと若者の東京流出についてですが、浜松につきましては、男女の差というのは資料には無いのですが、やはり女性の流出が多いと思われます。というのも全国的に見ると、地方から東京への流出というのが、圧倒的に女性の方が多いという数字が出ています。また、いつの時点で流出するのかというと、進学時に2割弱、就職時に8割強出ていくという数字が出ています。なぜ出て行ってしまうのかというと、田舎にいと、結婚が女の幸せだよというような伝統的な価値観、それが必ずしも悪いとは思わないのですが、そこに閉塞感を覚えたり、息苦しさを感じたりするからということがある様です。

あと意外と無視できないのが遊ぶ場所、楽しめる場所が少ないという意見です。実は浜松は比較的そういう場所はあるのではないかなと思うので、もっとその辺りの魅力を発信するということが重要ではないかと思えます。

欧米では、女性の社会進出が出生数の増加につながっているのですが、日本では、そうではありません。なぜかかというと、結婚によって家事や子育ての負担が女性に偏るという面がありまして、その辺りの意識改革が必要なのではないかと思えます。

その意識改革をどの様にしたらいいのかと考えた場合、まず就職先として、浜松はそういう点では恵まれているのですが、製造業というのは男社会のところがありまして、また男女の賃金格差だとかというところがありますので、ワーク・ライフ・バランスという意識が必要です。ちょっと上から目線になりますけれども、経営層への啓蒙が必要なのではないかなと考えております。

一応、社会保険労務士はワーク・ライフ・バランスとか、そういった面で貢献はできると思いますので、今、市の労働条件審査なんかもやっておりますけれども、その中でもこのワーク・ライフ・バランスに特化したようなもので、もし依頼があれば、経営者層にそういうものを啓蒙していくと言いますか、そういったことにも協力できればと思っております。

人口減少を反転させるという施策は、今後も重点的にやっていかなければならないと思います。しかし、先ほど寺本委員からもありましたが、人口減少を前提とした社会をつくっていくという視点も必要だと思いますので、それと両にらみでやっていくことも大事なのではないかと考えます。

(鎌田委員)

聖隷福祉事業団の鎌田でございます。多くの取り組みやデータを示していただいて、大変興味深く伺っておりました。聖隷福祉事業団もまさしく採用困難、人材

不足というところに直面しておりますので、長く働いていける仕組みづくり、外国人の雇用、障がい者と一緒に働ける職場づくりというふうに、さまざまな観点から取り組みをしている次第です。

今回の人口減につきましては、市の活性化に直結する大きな課題だと認識しています。その中で、交通手段、新幹線の問題もそうですね。のぞみが止まらなかったり、ひかりの本数が増えたとはいえ、まだまだ不便さを感じる。それから市内の交通、先ほど何人かの方からご意見がありましたけど、車のまちですので、バスかタクシーでしか移動ができないその不便さ。

それから、子育て世代の人たちも交通手段、高齢者の方々も車を手放せず、タクシーは金額が上がり、なので、なかなか車がないと事故多発に影響するでしょうし、不便さも感じる。そんな大きな課題を持っていると思います。

活性化については、浜松の魅力を追求する、発信する、集客する、そういうような観点から、少し時期や手段を具体化して、対策を講じる必要があるのではないかと感じておりました。

環境整備については、先ほど申し上げた子どもから若年層から高齢層まで、各層に応じた環境。それから外国人、障がい者に向けた環境。さまざまな観点からの環境というものを少し細分化して、検討していく必要があるなと思いました。

そして女性の働きやすさについては、育休の3年制度を導入しているわけですが、それでも、それ以降、小学校へ入学してからの働き継続がなかなか難しい。そういう課題もありますので、そこに向けては業者の方々と解決していければなと思いました。

最後になりますけれども、先ほど大橋さんもコメントされていましたが、今回、若者からのアンケート、意見交換ということで、浜松を既に選んでいる人たちが対象でしたので、愛着や移住については高評価であると見て取れましたけど、流出した人がなぜ戻らないのか。それから、どうなったら戻れるのか。その辺に関してするのであれば、ターゲットを変えたアンケート、意見交換をすると、明らかな課題がわかるのではないかと感じました。以上です。

(市長)

ありがとうございました。

それでは、これで皆さまお1人ずつからご意見をいただいたわけでございますけれども、大変皆さまから熱のこもったご意見をいただきまして、おかげさまで。ただ、時間がほぼ予定の時間となってしまうまして、もう少し突っ込んだ議論をさせていただければと思っていたのですが、時間が厳しくなってしまったわけなのですけれども。

一通り皆さまのご意見を伺っていただいて、どうしても何かもう一言言っておきたい方、いらっしゃいますでしょうか。

(秋元委員)

先ほど両新聞社様からの厳しいご意見もありまして、現実を見て生きるべきではないかということは、本当によくわかるのですが、やはり私は諦めたくないという気持ちがありまして、そんな中で、まだアメリカは人口が増えている国であったり、日本の中でも福岡市なんかは人口が増えている。移動したというだけのところもあるのですが、若者たちが人気で人口が増えている、そして活性化しているというまちも実際にあります。

浜松も本当にこれだけの恵まれた地域でございますので、ここは僕は諦めたくない。何としても浜松の魅力を守りたい。浜松を目指して、東京・大阪・京都へ行くのではなくて、浜松に行きたいんだという人たちが増えるような施策があれば、民間としても取り組んでいきたいと思っておりますので、黙ってじっとしているよりもやはり動きたい。そして何としても人を集めるんだ。若者たちを集めるんだ。浜松市すごいじゃないかというふうにしたいというところを、皆さまにぜひ諦めのところではなくて、ぜひそういったところで頑張ろうとしている方がいたら協力してあげてほしいですし、思い出すお店があったらぜひ行っていただきたい。お金を使っていただきたいということを切にお願いいたしまして、すみません。一言いわせていただきました。よろしくお願いいたします。

(石川委員)

今の秋元さんの話ではないですけども、浜松には細かい魅力は全部が集まっている。当然ながら行政から始まって、学校から企業から、メディアからありますが、それぞれがそれぞれのことをやっているのはよくわかるのですが、報道関係者の方も来られていて、よく思うのは、発信していきますというその発信が、メディアの方とどううまくできるかなというのを、最近すごく思っていて、ぜひ浜松を盛り上げるためにも、本当に秋元さんが言われているのを聞いて、ついこの前パワーフードでスッポン食べて、こんなものがあったのかと思って。ただ、それも自分も食べるまでも知りませんし、見てないといえば見てない。結局メディアの発信はこれからものすごく大事で、どう行政、企業、大学、金融も含めて、どうメディアがうまく発信をして、足並みをそろえられるか。

本当にパワーフードのことは、スッポンを食べたときに本当にそう思って、ぜひ一緒にできればいいなということを思っています。報道席に居られる方も一緒だと思いますけれども、そういったことが、うまく浜松に取り組めるといいなということを思っています。

(寺本委員)

東京一極集中は、日本の国土形成の問題であると思っています。地方が個別に問題意識をもつのではなくて、東京を除く46道府県が等しく持って、国に働きかけてほしい。東京も「うちにきてもらっては困る」というぐらいの施策を

出してもらいたい。そもそも東京一極集中の解消はバブル期の 1980 年代後半からずっといわれてきて、いまだに解決されていない。そういう意味で、市長のように優秀な霞が関官僚を経験した方が、自治体トップとして全国にたくさんいます。そういう方々が連携して、地方から国へ積極的に働きかけていただくというのが、解決の糸口になるのではないかなと思っています。市長、またひとつよろしくをお願いします。

（市長）

元々地方創生、人口減少という課題と東京一極集中の課題、両方いっぺんに是正しようということで、それが日本の国力、活力につながってくるという、そういう成り立ちで構成になっていますので、一体的に地域もそうですし、国もそうですし、考えなければいけないと思っていますので、引き続き国の方ともしっかり連携をしつつ、やって行きたいと思います。

次期総合戦略策定に向けて、ぜひこういったことをというようなご意見がありましたら、事務局の方にお伝えをいただければ、これからのわれわれの作業にぜひとも反映させていただきたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願いします。

それでは、意見交換はこの程度とさせていただきます、あとその他の事項について、事務局からお願いします。

5 国の動向について

（事務局から資料に基づき説明）

- ◆資料 4-1：「地方創生 10 年の取組と今後の推進方向」の概要
- ◆資料 4-2：新しい地方経済・生活環境創生本部（新地方創生本部）について

6 閉会

（事務局）

以上で、本日の内容は終了となります。本日の議事録としては、文章にて報告をさせていただきます。次回、来年 2025 年 2 月頃を予定しております。具体的なスケジュールの調整につきましては、改めてご連絡を申し上げます。

これをもちまして、2024 年度第 1 回浜松市“やらまいか”総合戦略推進会議を閉会いたします。長時間にわたりありがとうございました。